

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

日本独自のスヌーズレン環境を目指して

| | |
|------|---|
| 著者 | 嶺 也守寛 |
| 著者別名 | Yasuhiro Mine |
| 雑誌名 | 東洋大学研究シーズ集2019-2020 |
| ページ | 34-34 |
| 発行年 | 2019-08-29 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1060/00011080/ |

日本独自のスヌーズレン環境を目指して



ライフデザイン学部 人間環境デザイン学科

嶺 也守寛 准教授 Yasuhiro Mine

研究概要

発達障害の精神鎮静のためにスヌーズレンを導入している施設がみられます。今後は高齢者施設や健常者であっても精神沈静が必要な場面が出てくると予測されます。嶺研究室では対象者に合った日本独自のスヌーズレン機器の開発とその環境作りについて研究しております。

研究シーズの内容

スヌーズレンは、1970年代にオランダで Jan Hulsegge(ヤン・フルゼッヘ) and Ad Verheul(アド・フェアフル)が開発し実践した多重感覚環境を示します。スヌーズレン(Snoezelen)の語源は、「クンクン匂いを嗅ぐ」と言う意味のスヌッフェレン(Snuffelen)と「ウトウトする」と言う意味のドゥズレン(Doezelen)が合わさった造語になります。当初は、重度知的障害者の日常生活の質を高めるレクリエーション活動として取り組まれました。スヌーズレンの定義としては、「特別にデザインされた環境の中で、コントロールされた多重感覚の刺激を通して幸福感を産出するものである。」とされています。

嶺研究室では、川越商工会議所の異業種交流グループ・KOEDO会様と本学の産官学連携推進センターのご協力のもと共同研究テーマとして採択され、現在はスヌーズレン機材の三種の神器の1つと言われている「バブルチューブ」の開発を中心に進めております。研究内容としては、日本でスヌーズレンが始められたのは1980年代後半で、その後、主に知的障害や発達障害を持つ児童のために障害者施設内でスヌーズレンルームが導入されています。このスヌーズレンで使用される機器は、オランダやイギリスなどのメーカーが制作したものを輸入しているのが現状で、「機材が高額である。」「故障したときなどメンテナンスに時間や費用がかかる。」などの問題点が指摘されています。我々はこの問題点を解決するためにKOEDO会会員企業様の様々な技術的要素を用いて、日本独自のスヌーズレン機器の開発と今後のニーズに対応するべく高齢者施設への導入や一般の方の精神沈静を目的とした対象者に合わせたスヌーズレンルームの環境作りについて研究を進めております。



環境映像とバブルチューブを組み合わせたスヌーズレンルームの提案

研究シーズの応用例・産業界へのアピールポイント

日本でスヌーズレンルームを導入しているのは、主に知的障害や発達障害を対象とした施設でありましたが、今後は高齢者施設や大人の精神的疲労回復、ヨガなどのスポーツクラブなど我々の身近なところにスヌーズレンの考え方が入った「特別な部屋」の導入が進められると考えております。

特記事項(関連する発表論文・特許名称・出願番号等)